

コロナ禍を経て、初年次教育をどうアップデートするか

山田剛史

関西大学

1. はじめに

課題研究委員会による公募型企画シンポジウム「ウィズコロナ・ポストコロナの初年次教育」の2年目になる。ウィズコロナの色彩が強かった1年目から、ポストコロナに比重を置いた2年目のシンポジウムでは、3名の会員が登壇し、それぞれの大学における多様な取組について話題提供してくれた。具体的には、(1) 地方国立大学の理工系学部における「心理的安全性」を軸とした初年次教育に関する山中報告、(2) 関西圏の中規模私立大学におけるオンデマンドを活用した「入学前教育」に関する高良報告、そして、(3) 関西圏の小規模私立大学における「クオーター化」「経験学習 (サービスラーニング)」を中心とした初年次教育に関する田中報告の三つである。

2. 指定討論

各シンポジストによる報告の詳細については、当日の発表資料や学会誌に掲載される報告でご覧いただきたい。各報告を踏まえて、筆者より指定討論と質疑応答を行った。

山中氏 (香川大学) の発表内容の特徴は「心理的安全性」「挙手行動」「ロジカル思考演習」とまとめられる。その上で、以下の質疑応答を行った。質問①「『挙手』を指導し、加点对象とするということと、『主体性』との関係をどう見るか」に対して、「手を挙げることが多数派になり、どんどん手を挙げるようになる。一度声を発すると、『楽しい』というコメントが返ってくる。自信が付いて、手が挙がる。この好循環が出てくる。」といった回答がなされた。質問②「到達目標の達成という観点での変化はあったか、どのように評価しているか」に対して、「多くの学生はロジカル思考を使って文章を書くことが出来るようになってきている。悩みとしては一部の学生においては継続しないということはあるため、組織的な取組が必要だと考えている。」と回答された。質問③「多様な教員を巻き込んでチームを創る上で最も重視した点やうまく行った点、まだ課題だと感じている点は何か」に対して、「『待つ』ということ。『それいいね』『先生も気づかなかった』などポジティブなフィードバックを積極的に入れること。ただし、全学的な取組という点では課題がある。」といった回答を得た。

高良氏 (桃山学院大学) の発表内容の特徴は「入学前教育」「LMS(オンデマンド)」「教職学協働」とまとめられる。その上で、以下の質疑応答を行った。質問①「入学後の初年次教育 (学部) との接続はどうなっているか」に対して、「当該コンテンツだけで必要な力が身につくわけではない。情報や知識を提供して、初年次教育で学ぶ必要性やきっかけにしよう。」「入学前教育と初年次教育とで重複する部分もある。何度も学べることがあって良いと考える。」と回答があった。質問②「共通教育機構・学習支援センターによる教職学

の具体的な運営や、コンテンツに関する教員との協働はどのように行っているか(学生のニーズ聴取や内容・評価等について)」に対して、「入学前教育設計の原点にあるのはフロントで学生と接している学習支援センターでの取組。先生方に対する出張セミナー(サポートプログラム)や教職員合同での学内共同研究もやってきた。これらを通じて得られた教職員の声に基づいて教材やプログラムを構築している。」といった回答が得られた。質問③「入学前教育をオンデマンドで実施する際の課題や今後の展開は」に対して、「学習ログデータ等から、最初に入ってくればある程度継続も可能だが、そもそも入ってくれない学生にどうアプローチすれば良いのかは課題がある。」と回答された。

田中氏(関西国際大学)の発表内容の特徴は「クォーター化」「対面／非対面」「経験学習」とまとめられる。その上で、以下の質疑応答を行った。質問①「初年次教育のクォーター化により、当該科目及び春学期後半の専門基礎科目の成績が必ずしも良好とは言えない結果をどう考えるか、単に圧縮した内容ではないとあるが、どのような内容・方法等の改善を行ったのか」に対して、「週2回と課題・採点のサイクルが早くなるため、内容の厳選は行ったが依然課題感はある。ただし、成績不良の学生に対しては第2クォーターにて早期に手当て出来ることは利点。前半の基礎科目と後半の専門基礎科目の接続(構造)については引き続き検討していきたい」といった回答があった。質問②「サービスマニキュア履修による対人面での適応促進の背景にはどのような理由・仕掛けがあるのか」に対して、「特に仕掛けがあったわけではないが、学生の振り返りからも、コロナ禍で人と人との関わりに飢えていたことがうかがえる」などの回答が得られた。質問③「オンラインの機能によるフリーライダーの防止は、具体的にどのような工夫を行ったのか」に対して、「例えば、あるプログラムではグループワークでも一人ひとりが何をしたかが分かるように見える化することでフリーライダーを防止することに繋がった」と回答された。

3. おわりに

指定討論に対する登壇者からの回答の後、今回の論点としてまとめさせてもらった。具体的には、1) 学生の諸問題(学力、動機づけ、主体性、対人関係等)を解決しうる組織的・持続的な初年次教育をどう構築するか、2) 高大接続・入学前教育を含む、柔軟かつ効果的な単位認定・教育制度をどう整備するか、3) ポストコロナへの展開として、初年次教育におけるオンライン(オンデマンド)をどう活用するか、の3点である。

その他、参加者からも様々な観点からの質問があり、積極的なディスカッションがなされた。特に、コロナ禍で分断された教員と学生、学生同士の繋がりや意義・重要性に関わる発言が多くみられた。関連して、学生の学びに対するモチベーションをどう喚起・維持・向上させるかといった問題についても随所で触れられた。テクノロジーの進展により出来ることは増えてきたが、学生が安心安全に学ぶ土台・基盤を創る機能としての初年次教育の役割は依然として衰えるどころか、むしろより重要性を帯びてきたのだと実感する。まだまだ議論が尽きない中、盛会のうちに本シンポジウムを終えることができた。登壇・参加されたみなさまに感謝申し上げます。